

「高山社学」と世界遺産学習

－地域への愛着や誇りを基盤とする学習活動を通して－

春山秀幸*

はじめに

群馬県藤岡市高山に所在する高山社跡は、平成26年に「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成資産の一つとしてユネスコ世界遺産一覧表に記載された。高山社は、高山社蚕業学校や分教場における生徒の育成、養蚕教師の派遣を通して、高山長五郎が開発した清温育という養蚕法を国内外に広めた養蚕教育機関である。高山社跡は、富岡製糸場を初めとする他の構成資産との関連の中で、革新的な養蚕技術の開発とその普及に関わる歴史を今に伝えている。

富岡製糸場および関連する絹産業遺産をめぐる研究は、政治・経済・文化等の多様な分野から進められている。しかし、世界遺産の継承を推進するための意識の基盤を育む学校教育の視点からの研究は、十分になされているとはいえない。

そこで、本稿では、藤岡市で実践されている「高山社学」（以下、高山社学）という特色ある教育活動について、自身が関わった事例⁽¹⁾を交えて紹介するとともに、世界遺産を活用した学習のあり方について考察していく。

身近な地域についての学習が、郷土への愛着や誇りを高める上で大きな効果があるのは言うまでもない。そこに、世界遺産という視点を交えて取り組むことで、地域の貴重な自然や文化に対する多様な見方や考え方を育み、次代につなげようとする当事者意識を高めていければと考える。

1 高山社学の概要

(1) 高山社学とは

平成20年学習指導要領の道徳の目標には、「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図る人間を育成する。」ことが示されており、これは平成29年の改訂でも引き継がれている。

そのような考え方を受け、高山社学では、「高山社の歴史的価値について学び、郷土を誇りに思い、郷土を愛する子どもの育成を図るとともに、持続可能な藤岡市を目指す」ことを目的としている⁽²⁾。また、高山社学を通じて目指す育成すべき資質・能力について、以下のように具体的に示している。

〈知識・技能〉・高山社の歴史的価値や郷土の歴史や人物、文化等について気付くこと

〈思考力・判断力・表現力〉・高山社や養蚕、郷土の歴史や人物、文化等について調べたり、体験したりしたことを、自分の言葉でまとめて発信すること

〈学びに向かう力・人間性等〉・高山社や養蚕、郷土の歴史や人物、文化等について関心を持ち、主体的に調べようとする意欲や態度を涵養すること

・学習したことを生かし、郷土のよさや郷土に根ざした文化や伝統を伝えたり、積極的にかかわったりしていこうとする意欲や態度を涵養すること

(2) 高山社学の歩み

藤岡市の小学校中学年向け社会科副読本には、水田開発のための用水開削に関わる学習と対比させる位置づけで、「養蚕の発展につくした人」という単元が設定されている。この単元では、地域の特色ある産業である養蚕の改良に関する研究や教育・普及活動に取り組み、農民の生活向上に尽力した高山長五郎の人物像に焦点が当てられている。児童は、先人の努力や工夫の上に、現在の暮らしがあることを

*はるやま ひでゆき・群馬県立世界遺産センター

表1 高山社学の歩み

年 度	取 組 の 内 容
平成24年度	・「高山社学を教育課程に編成するための検討委員会」を設立 ・「平成25年度版『高山社学』指導の手引き」（以下、「指導の手引き」）の作成 社会科、生活科・理科、道徳、総合的な学習等、多様な学習活動との横断的实践を例示
平成25年度	・「指導の手引き」を元に、全小中学校で実践を開始 小学校理科「季節と生物」モンシロチョウとカイコガの対比学習（養蚕体験） 高山社跡見学（小学校4年生。中学校2年生は平成30年度から継続実施） ・市教育研究所「高山社学」研究班による研究実施 授業開発および授業実践・公開 「高山社学ティーチャーズガイド1」（以下、「TG1」）の作成
平成26年度	・4月26日、「富岡製糸場と絹産業遺産群」に対して世界遺産（文化遺産）の登録勧告 6月25日に正式登録 ・「高山社学TG1」を活用した授業実践 ・「高山社学TG2」の作成（テーマ「だれもが語れる心のふるさと高山社」） ・市教頭会による高山社学関連の研修を実施、県教頭会大会で発表 「教職員の専門性向上のための教頭の関わり ～特色ある地域学習の実践を通して～」
平成27年度	・「高山社学TG1・2」を活用した授業実践の継続（校区毎に教材開発を推進）
平成28年度	・小中9年間をつなぐ高山社学系統表の検討・作成（小中一貫教育の推進と連動して実施）
平成29～ 令和2年度	・中学校区の系統表を活用した授業実践の継続 ・市教育委員会による高山社学研修会の実施 ・高山社跡見学用資料および解説者用資料の作成

知り、そのような歴史がある地域への関心や愛着の念を高めている。

平成21年に高山社跡が国指定史跡に指定され、世界遺産登録へ向けた地域的な機運が高まる中で、市内の学校では高山社跡に対する教育的な価値の見直しや、指導内容・方法の工夫が進められた（2012 伴野悠理）。このような動向を受け、藤岡市教育委員会では高山社学の確立・定着へ向けた取組を推進した（表1）。

（3）高山社学推進へ向けた取組

①高山社学指導書の作成

平成24年度に作成された「指導の手引き」は、高山社学に関する基本的な指針となったが、さらに実践の蓄積を通じた具体的な指導書が必要とされた。そのため、翌年には市教育研究所に高山社学班が設置され研究が進められた。成果物である「高山社学ティーチャーズガイド1」（以下、高山社学TG1）は、各校区における授業研究および実践を核とする

三部構成となっている（図1、2014 藤岡市教育研究所）。

「実践編」では、研究員による社会科授業の実践および市内各校の試行的授業実践を取り上げている（表2）。「資料編」では、教材開発のための参考資料を集成している。高山社関連画像集は市文化財保護課の協力を得て作成し、画像ファイルを校務支援システム上の共有フォルダに収め、授業で活用できる仕組を整えた。市小学校社会科部会が調査・作成した、各校区に現存する養蚕建築等の分布図からは、地域の特色が読み取れる。調査時に築かれた地域住民や関連機関とのネットワークは、重要な情報源である。「発展編」では、世界遺産学習やESDの視点による学習活動の紹介を行い、ユネスコスクールへの加入が進む市内各



図1 高山社学TG1表紙

表2 高山社学T G 1 掲載の実践例（1・2は市教育研究所における研究）

	教科	学年	単元名等	学校	特色ある活動
1	社会	小4	養蚕の発展につくした人	藤岡第一小	地域人材・文化財の活用
2	社会	小4	養蚕の発展につくした人	日野小	地域人材の活用
3	社会	小4	養蚕の発展につくした人	小野小	堰・用水路との対比学習 6年間の系統的学習
4	総合	小3 ～5	地域の産業を支えた人々 世界の宝物を守ろう 等	美九里西小	地域人材・文化財の活用 総合を核とする系統的学習
5	総合	中2	世界遺産キャラバン	東中	富岡製糸場伝道師協会を活用した 世界遺産学習
6	社会	中2	文明開化・富国強兵	小野中	高山社学と世界遺産学習
7	道徳	中2	不屈の養蚕家：高山長五郎		(理想の実現)、社会科への導入
8	理科	小3	チョウをそだてよう	小野小	モンシロチョウとカイコガ
9	理科	小3	こん虫を調べよう	日野小	総合「お年寄りから教わろう」 養蚕体験と関連付け
10	総合	小4	蚕と繭のみつをさぐるう	鬼石北小	蚕・繭・高山社・桐生織物をキー ワードとする探究的な学習
11	道徳	小2	紙芝居で子供たちに伝える藤岡の歴史	美九里東小	まゆダーマンの「養蚕改良高山社」のおはなし (郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。)
12	道徳	小5	よりよい生活のためにできること	神流小	「苦心の末の大きなまゆ」 (創意工夫)

校への啓発資料とした。

②地域意識を高める指導の工夫

市内に所在する高山社跡が世界遺産に登録されたことにより、子どもたちの世界遺産への興味・関心の高まりが見られたのは確かである。

しかし、授業を実践する中で、「子どもたちが高山社跡の所在する地域を、思ったほど身近なものとして感じていないのではないか。」という教職員の声がかれるようになった。その理由として、「身近な地域」に対する感覚が、発達段階や地域間の隔たりによって異なることが上げられた。特に小学校低・中学年は、自分に関わる生活圏以外の地域は、隣接する校区であってもさほど身近には感じていないのである。さらに、平成の大合併により藤岡市に編入された地域では、教職員も含めてその傾向が強いことがわかった。そのような意識の差を埋め、高山社跡を身近な地域の事象として実感させるために、地域をつなぐための授業の工夫を行った。

a) 関係する人物でつなぐ

高山社跡を学習素材とする活動において、それぞれの校区で活躍した高山社との関連を有する人物を取り上げることで、地域間の意識の距離を縮めるこ

とができると考えた。

美土里小学校では、高山長五郎の弟である折茂藤太郎を取り上げた。藤太郎は、校区内で高山社の養蚕法の教育を担う分教場を開設して高山社を支えるとともに、実弟の木村九蔵が社長を務める埼玉県の競進社との協調的な関係づくりにも大きな役割を果たした。

そこで、校区内に居住する藤太郎の子孫を招聘して、高山三兄弟の活躍や、昔の生活・養蚕の様子などの話を聞いたり、質問をしたりする授業を行った。知っている地名や親しみのある地域の方との交流を通して、児童は高山社跡を身近なものとして実感し、意欲的に学習に取り組むことができた。

藤岡第一小学校や日野小学校でも、町田菊次郎(高山社社長)や高橋茂太郎(同副社長)に関わる地域人材を招いた出前授業を通して、同様の成果が得られている。なお、例示したような著名な人物である必要はなく、身近な人物でもよい。

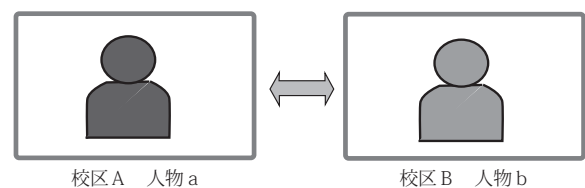
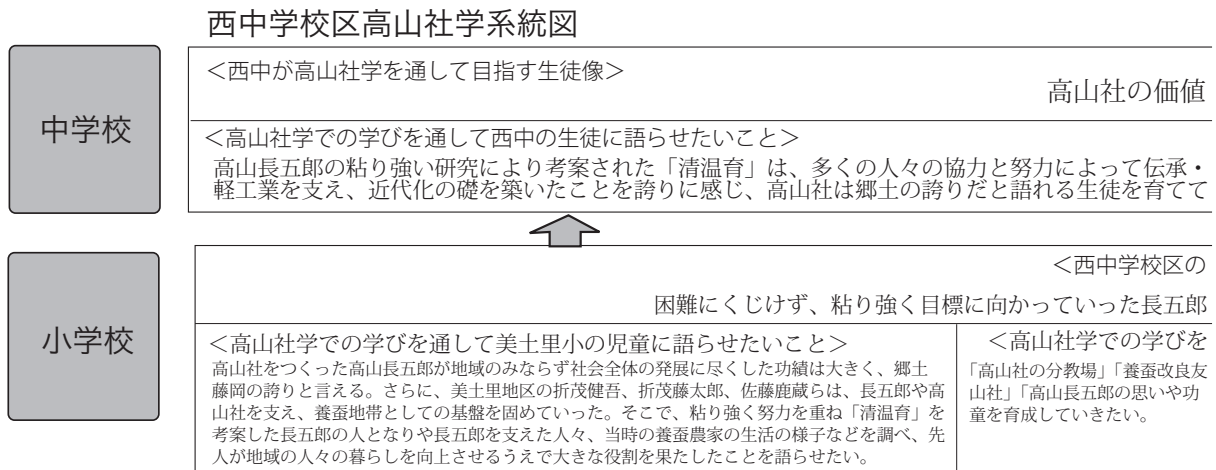


図2 人物でつなぐ対比例

表3 高山社学系統表の一例



	小学 1 年	小学 2 年	小学 3 年	小学 4 年
国 語				
社 会			<ul style="list-style-type: none"> ★わたしたちのまちみんなのまち ・学校のまわり ・藤岡市ってどんなところ 	<ul style="list-style-type: none"> ★きょう日に伝わる願い ・昔の暮らし ・ふるさとれきしまップ ・用水路をつくる ・養蚕の発展につくした人々 ★わたしたちの群馬県 ・ゆたかな自然を生かす ・伝とうや文化をうけつぐ ・日本や世界とつながる県
理 科			★こん虫をそだてよう	○高山社跡見学（美・日）
生 活	<ul style="list-style-type: none"> ★きれいにさいてね ★なつだあそぼう ★たのしいあきいっぱい ★ふゆをたのしもう ・むかしからつたわるあそびをたのしもう 	<ul style="list-style-type: none"> ★どきどきわくわくまちたんけん ★もとなかよしまちたんけん ★つたわる広がるわたしの生かつ ★みんなであつかうまちのしせつ 		
		○カイクオ見学（3年）の見学（日）		
音 楽				
図工・美術				
家 庭				
技 術				
外国語				
道 徳	★紙芝居「まゆダーマンの養蚕改良高山社」	★えんぎだるま		<ul style="list-style-type: none"> ★郷土を愛する心を持って ★世界遺産の富岡製糸場
		○学校大すき（美）	★りっぱなまゆを作りたい	
総合的な学習			★カイクオはかせになろう（カイクオを育てよう）	<ul style="list-style-type: none"> ○昔の暮らしや高山社についてもっと知ろう（美） ・歴史民俗資料館見学 ○クリーン作戦（美） ○ふるさと探検をしよう（平）
特活・学校行事	◇春の遠足（浅間公園）（美）	◇春の遠足（七興山）（美）	◇春の遠足（庚申山）（美）	◇春の遠足（庚申山）（美）

※ 上段は各校の共通事項。下段は各校独自の取組。（美）美土里小、（平）平井小、（日）日野小 ※ ★小学校3校の共通

<高山社との関連から見た西中学校区の特徴>

西中学校区には、緑整製糸社顕彰碑や高山長五郎の弟・折茂藤太郎の家を美土里地区に、高山長五郎の実弟・木村九蔵が設立した競進社で活躍した西中学校区の農家戸数1319戸のうち、9.6%の1263戸が養蚕農家であり、養蚕業が盛んに行われた地域であったと言える。各地区の人物を

<西中学校区の指導のポイント>

- ・高山長五郎だけでなく、それぞれの地域で高山社を支えていた人物などを取り上げ、高山社に対する理解をさらに深める。
- ・高山社学を、ふるさと学習の一環と位置付けて、高山社を含めたそれぞれの校区の特色やよさに気付かせ、学ぶようにしていく。

(平成 28 年度作成時の系統表、一部改変)

を語れ、郷土を誇りに思える生徒

普及がなされ、その成果が富岡製糸場の発展に多分に寄与したことを生徒に気付かせたい。そして、明治・大正時代の日本のいききたい。



小学校が高山社学を通して目指す児童像>

さんや、長五郎さんを支えた人々の思いや願いに気づき、郷土を誇りに思える児童

通して平井小の児童に語らせたいこと>

愛社」等の学びを通して、「地域の繁栄と養蚕の発展に寄与した高績」等を学び、高山長五郎が藤岡の誇る先輩であることを語れる児童

<高山社学での学びを通して日野小の児童に語らせたいこと>

日野地区は古くから養蚕業がさかんな地域であり、日野地区で生産された良質の絹織物を日野絹と言ひ、江戸や京都でもてはやされた。また、高山社の副社長だった高橋茂太郎がおり、分教場を開くとともに、高山長五郎の功德碑建設委員長を務めた。故郷（日野）に目を向け、地域に根ざした学習を進めていきながら地域の自然・歴史・文化・伝統などのすばらしさに気づき、その思いを表現できるようにしていきたい。また、人々の思いや願いに迫り、何ができるかを考え実践できるようにしていきたい。

小学 5 年	小学 6 年	中学 1 年	中学 2 年	中学 3 年
	<ul style="list-style-type: none"> ★ようこそ、わたしたちの町へ ★未来がよりよくなるために ・平和のとりでを築く 		○高山社を調べて新聞にまとめよう	
<ul style="list-style-type: none"> ★国土の地形の特色 ★国土の気候の特色 ★私たちの生活と環境 (世界遺産の定義、白神山地) 	<ul style="list-style-type: none"> ★縄文のむらから古墳のくにへ ★天皇中心の国づくり (世界遺産の定義) ★明治の国づくりを進めた人々 ・富岡製糸場 ★平城宮跡を守るために (地域の遺跡 ・文化財・保存につくした人調べ) 	○世界のさまざまな地域の調査	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な地域の調査 ○革命の進展 	○大正・昭和時代の絹産業について
		○葉のつくりとはたらき	○無セキツイ動物のなかま	
		○被子植物のなかま		
<ul style="list-style-type: none"> ★藤岡市の歌（市音楽発表会） ★われは海の子（臨海学校） 				
	○あなたは家庭や地域の宝物（美）		○和服の文化	
	★外国人に藤岡市と学校の特徴を伝えよう	○日本文化を紹介しよう	○衣服の手入れ	
			○建物のつくり	
			○住んでいるところを紹介しよう	
<ul style="list-style-type: none"> ★船津伝次平 ★尾瀬の自然を見つめて ★苦心の末の大きなまゆ ○高山社見学（平） ○ふるさとの料理（お米）（平） 	<ul style="list-style-type: none"> ★飛行機王中島知久平 ★自貢の杖新島襄 ○平井地区の良さを伝えよう（平） ○鎌倉の歴史を調べよう（平） ○藤岡の歴史を調べよう（平） ○富岡製糸場見学（平） 	○高山長五郎を支えた人々	○養蚕法の開発を目指して	○近代化の礎を築いた高山社
<ul style="list-style-type: none"> ★臨海学校 ◇春の遠足（多胡の碑）（美） 			○高山社見学	
	◇春の遠足（地区歴史探検）（美）			

実践、○各校の特色ある実践、◇高山社学と関連付けた「東国文化」の学習

齋藤兵吾郎や養蚕改良友愛社を平井地区に、高山社の副社長として活躍した高橋茂太郎や上質な絹織物・日野絹を日野地区に抱えている。通して、高山社を学ぶことに適した地域である。

(例：東国文化等)

b) 類似する事象の対比を通してつなぐ

高山社跡を学習素材とする活動において、校区内にある高山社跡と類似・関連する事象を対比して取り上げることで、興味・関心を高められると考えた。

鬼石北小学校では、学校の近くに残る養蚕農家母屋兼蚕室を比較対象として取り上げた。地域の農家の見学や住民からの聞き取りを通して、養蚕にまつわる作業や生活について事前学習を行った。この体験を通して、高山社跡見学の際に、建物の造りの共通性に気付いたり、高山長五郎が行った清温育を開発するための努力や工夫の様子を感じたりすることができた。

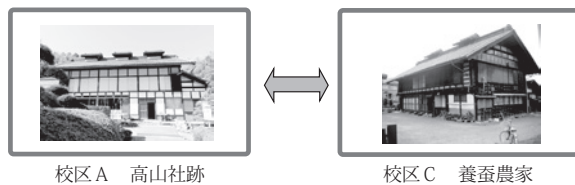


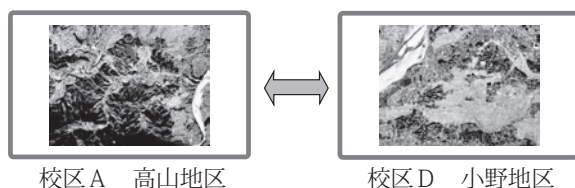
図3 類似する事象の対比例

c) 異なる条件の対比を通してつなぐ

地域間の諸条件の相違点に視点を当て、その要因を考えることで、相互の地域への関心や理解を持たせられると考えた。

小野小学校では、山間地の高山地区と平坦地の自校区の自然や土地利用に関する地図や写真を比較し、相違点を読み取る活動を取り入れた。また、地域の用水開発に尽くした孝順和尚と養蚕改良に努めた長五郎という人物に触れ、ほぼ同時期に活躍した二人の思いを対比した話し合い活動を交えた。

取り組んだ方法の違いはあるが、それぞれの地域で人々の生活の向上を目指した先人の努力や工夫、生活の様子への関心を高めることを、資料を基にして具体的に考えることができた。



(出典：国土地理院ウェブサイト <https://mapps.gsi.go.jp/maplibSeach.do#1>)

図4 異なる条件の対比例

③系統的な学習の整備

「指導の手引き」では、高山社学について教科横断的な教育課程を編成することについて記されている。「高山社学T G 1」では、美九里西小学校の高山社学推進計画と、小野小学校による6年間の教科横断的な系統表を参考事例として紹介している。

平成26年、藤岡市はモデル校区を設定して小中一貫教育の推進を始め、翌27年には全中学校校区に広げた。小中9年間を通した「学びの連続性、生徒指導の継続」を目指して、すべての教育活動の見直しが図られた。これを受けて平成28年度には、高山社学についても一貫校区（中学校区）ごとの特色を生かした9年間の系統性についての検討が行なわれた。

各中学校区の小中合同研修会では、まず、高山社学に関する目指す子ども像を共有した上で、複数回に亘る全体会や、教科部会単位での研修会の開催、校務支援システムを活用した情報交換が繰り返された。完成した系統表は、実践を通して適宜、改善が図られている。

系統表（表3）は、「高山社学を通して語らせたこと」をテーマに、「高山社学で目指す姿」「教科等の具体的な系統」「高山社との関連から見た校区の特色」「校区の指導のポイント」という項目から構成されている。表中には、各校区の地域的特色が明確に示されており、地域意識を形成していく指導を行う上での指針となっている。

④地域との協働による教育活動の充実

児童生徒の現地見学は、高山社跡に関する直接的な学習活動の柱の一つである。見学は、市教育委員会の調整を通して、高山社跡に纏わる歴史や文化を学び、顕彰する地域団体である高山社顕彰会の協力を得て実施されている。児童生徒にとっては、地域の人と触れ合う有意義な体験ともなっている。

その活動の中で、小中学校の発達段階に応じた解説内容の検討が必要となり、平成30・令和元年度には担当者間で協議を行った。その結果、学校の教育課程に対応した内容の小学生用と中学生用のワークシートと、解説者用資料（図5）を作成した。学校、解説者の意識の共有が図られた点、意義があった。



図5 小学生用ワークシート（解説者用）

なお、平成30年度から藤岡市では、小中一貫教育を基盤とするコミュニティ・スクールの推進が行われている。この動きの中で、小中一貫校を形成する小中学校では、目指す子ども像を共有して、教育活動の編成を進めている。高山社学においても校区独自の活動は生かしつつ、地域との協働の視点を明確にして、小中一貫校として同一歩調で取り組んでいくこととなった。

2 高山社学と世界遺産学習

(1) 世界遺産学習へ向けた学び

高山社学確立以前の高山社に関する学習は、小学校中学年社会科の中に位置付けられた身近な地域を対象とする「地域学習」である。副読本の活用を通して先人の活躍や地域の特色に迫る学習活動が主となっている。高山社学の導入以降は、養蚕体験や地域住民との交流、高山社跡現地見学など、身近な地域との直接の関わりを通して行う体験学習が計画的に取り込まれていった。五感を生かした直接観察法による学びや、聞き取り調査を含め様々な学びのスキルを身に付ける機会が設定された。地域学習としての内容に止まらず、学年や教科等を横断するより多様な内容を学習の対象とすることとなり、「ふるさと学習」としての広がりを見せている⁽³⁾。

元来、子どもたちは、身近な地域への興味・関心が高く、意欲的に調べ学習や体験活動などに取り組む傾向がある。しかし、往々にしてそれが活発な活動そのものに止まり、学習内容が定着しなかったり、

本来的な理解まで深まらず、ねらいが達成できなかったりするという指摘もある。単なる事象への表面的な理解ではなく、高山社跡について学んだ内容や見方・考え方を活用して、課題意識を持ってその解決に当たろうとする態度の育成が求められる。そのために、未来を見つめる視点の育成も含めて、世界遺産学習の視点を取り込んでいくこととした。

世界遺産学習とは、世界遺産を通してESD (Education for Sustainable Development 持続可能な開発のための教育) に迫る学習と言われる。そこで、世界遺産である高山社跡という魅力的な学習素材を生かした授業づくりの工夫に取り組むことにより、ESDのねらいを達成しようと考えた。

高山社跡を含む世界遺産は、「過去から引継ぎ、未来へと伝えていかなければならない人類共通の遺産」である。世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約（いわゆる世界遺産条約）では、「締約国は、あらゆる適当な手段を用いて、特に教育及び情報を通じて、(中略)文化及び自然の遺産に対する自国民の認識及び尊重の念を強化するように努力する。」(第27条1)と規定されている。その意味で、学校教育が担う役割は大きい。平成29年3月告示の小学校学習指導要領の社会には、「世界文化遺産に登録されているものなどを取り上げ、我が国の代表的な文化遺産を通して学習できるように配慮することなどが明示されている。

国内における世界遺産学習の具体的実践は、平成10年に世界遺産に登録された「古都奈良の文化財」を対象とする奈良市の取組が端緒となる。副読本の作成や現地学習の実施などの検討を通して、平成20年度には「奈良大好き世界遺産学習」⁽⁴⁾が確立された。内容としては、奈良市に所在する8つの構成資産に関する直接的な学習や、自然、歴史、国際理解などにわたる教科横断的な学習が展開され、年々対象を広げている。

奈良市では、世界遺産学習について、「世界遺産についての学習」「世界遺産のための学習」「世界遺産を通じた学習」という三つの学習段階を示している⁽⁵⁾。高山社学でもこれと対応させた学習段階を設定し、その前段階に「世界遺産に出会うための学

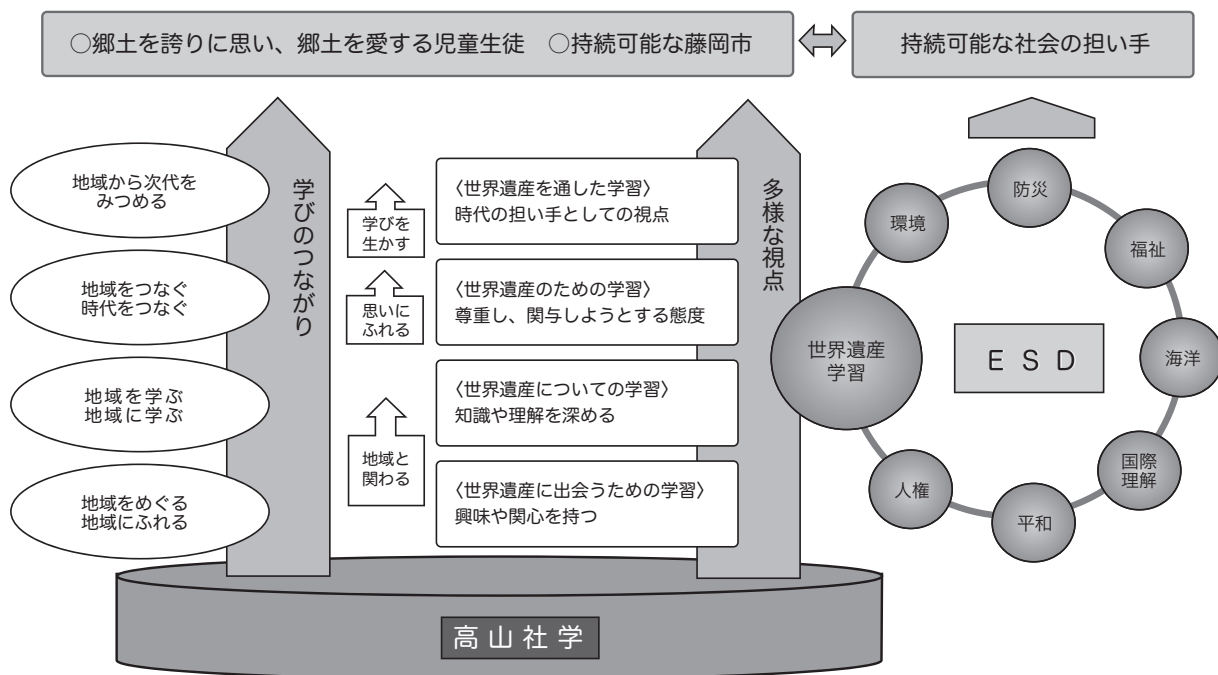


図6 高山社学と世界遺産学習およびESDの関連図

習」を位置付けた。これは、小学校低学年において、自分との関わりを通して地域意識の素地を育むための、世界遺産の具体的な学習の前段階である。

中学年では、地域住民や関係機関などとの連携を通して、高山社跡についての知識や理解を深める学習を行う。また、高学年では、世界遺産の保護や価値の発信に関わる人の思いにふれ、高山社跡を尊重し、関わろうとする態度を育てている。そして、中学校ではそれまでの既習事項を生かし、環境や国際理解、平和、人権等に関する視点を交え、持続可能な社会の担い手としての態度を育むことを目指している（図6）。

そもそも高山社跡の世界遺産としての価値は、富岡製糸場を中心とする4つの構成資産の連携を通じた生糸の大量生産を実現した技術革新と、世界との技術交流という主題の中にある。その全体像の詳細に迫るためには、小中9年間の系統的な学習の蓄積が必要であり、各段階での学習内容の中に、世界遺産を通してESDに迫る学習を意図的に配置していくことが大切である。

ここでは、世界遺産の概要をつかみ、興味関心を高めるための事例を紹介する（2013 木村弘美・小

板橋庸・磯部摩耶子・荻原麻理）。

小野小学校では、校区内で行われた水田開発（中村堰）に関わる単元の学習において、高山社跡が所在する山間地と平坦地である校区を対比する学習を実践した。水田と桑畑の分布の特徴を、地図や写真から読み取らせ、分布の差異に関わる要因を考えさせ、様々な視点から話し合い活動を行った。後に高山社社長となる町田菊次郎は、水田開発を目指した用水導水計画に頓挫した際、高山長五郎の助言により養蚕改良に力を尽くしたというエピソード（1897新井茂平）を通して、世界遺産となる高山社跡の一側面に触れ、多くの意見が出された（図7）。

また、対比資料として、世界遺産のフィリピン・コルディリエーラの棚田群と県内の古墳時代の水田跡を取り上げた。山間地の水田化や、1枚の面積が畳1畳ほどと小さい水田に対する驚きを通して、水田の造成や導水の工夫について気付かせるようにした。

地域や時代が異なっても、人々が生活をより豊かにするために、自然条件を生かしたり克服したりしてきたことについて、予想を元に自分の考えを持ち、他者との交流を意図的に行いながら、考えを深めて

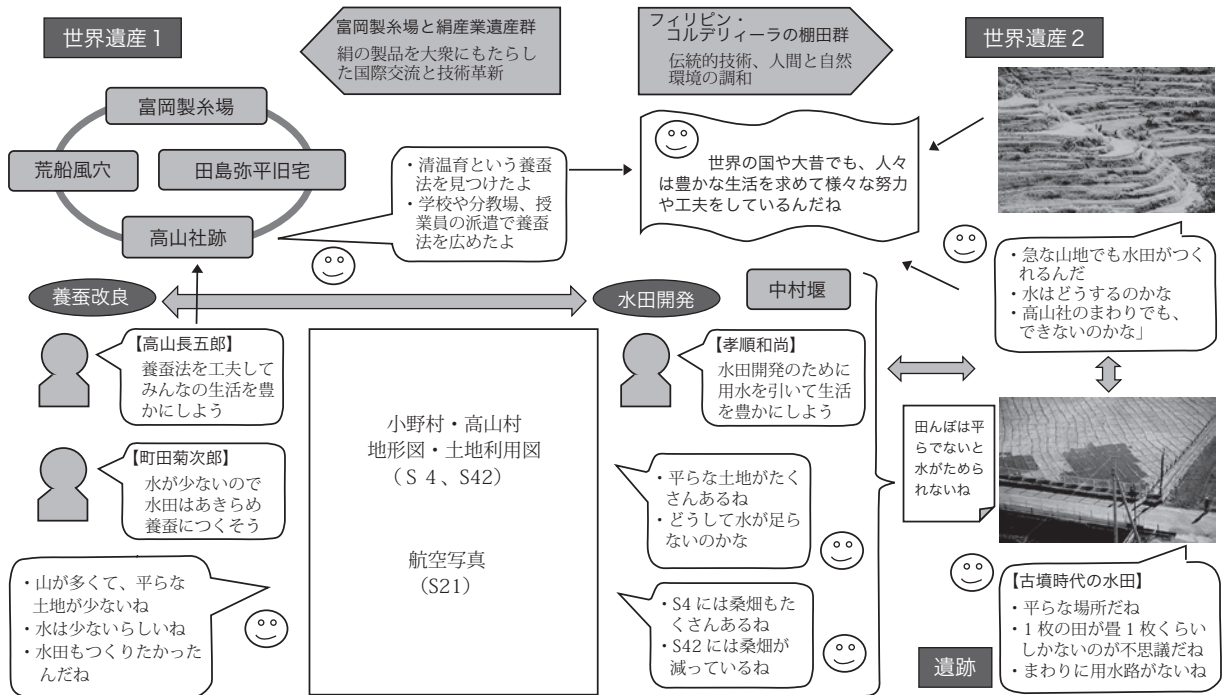


図7 国内外の世界遺産を取り入れた授業実践例

いる姿が見られた。このように、地域の用水や産業、自然などの様々な事象との対比学習は、世界遺産の有無に関わらずどの地域でも可能であり、効果的な教育活動として活用できる⁽⁵⁾。

授業の中で、国内外の世界遺産を取り上げることは、様々な地域の文化の特性や共通性などへの関心を高め、国際化の視点や多様な文化や自然などの広い視野の育成につながり、身近な地域の見方、接し方に反映されていくことが期待される。

(2) SDGsの視点から見た高山社学

①高山社学の位置付け

近年、学び方としてのESDに加えて、学びのゴール(目的)としてのSDGs(Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標)に対する関心や期待が高まっている。SDGsは、「誰一人置き去りにしない」「よりよい地球をつくるために」をスローガンに、2030年までに国際社会が一丸となって取り組むべき国際目標である。そのために持続可能な世界を実現するための17の目標と169のターゲットが設定されている。これらを具現化するための基盤は教育であり、学校そして教職員の担う役割は極めて重要であ

ると考える。

世界遺産学習としての高山社学は、主に目標4および目標11との関連で推進される。目標4は、「質の高い教育をみんなに」であり、特に、「4.7 すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯教育の機会を促進する」ことについて、学校は子どもたちと直接的に関わっていく。また、目標11「住み続けられるまちづくりを」の中の、「11.4 世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する」により、高山社跡は直接的な学習の対象となることが示されている。それ以外にも、関連する目標を交えた多様な視点から、身近な地域を見つめることを通して、子どもたちに持続可能な社会の担い手としての基礎を築いていくことになる。

学校におけるSDGsへの取組は、その意義の理解および共通認識の形成と、具体的な実践へ向けた指導内容の研修などを通して始まっている。

②SDGsを取り入れた実践例

高山社跡が校区内に所在する美九里西小学校は、高山社跡を活用した教育活動の推進に当たり、平成24年に市内初のユネスコスクール加盟校となった。

藤岡市立美九里西小学校

「高山社学」に関わるESD・SDGs

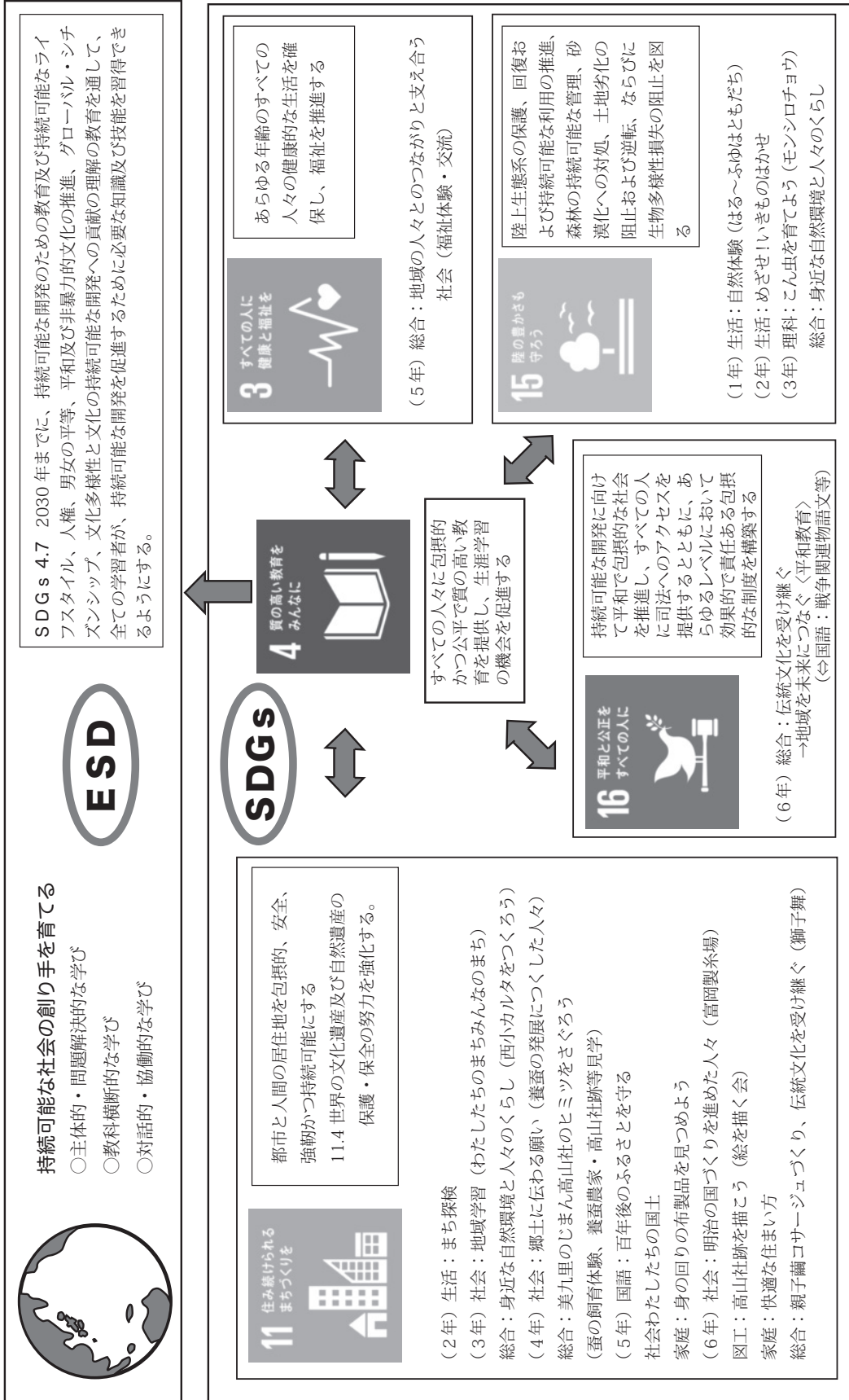


図8 ESD・SDGsの視点から見た高山社学関連の学習

また、平成31年度には、「ユネスコスクールSDGsアシストプロジェクト」への参加を通して、教育活動の見直しを行った。図8は、ESDおよびSDGsの実践についての関連を示したものである。学年や教科を縦・横断する教育活動は、世界遺産である高山社跡を核に、平和や福祉、環境などの視点を通して、自他を尊重する思いとともに地域への愛着を高め、よりよい地域づくりに関わろうとする態度を育てていくように構成されている。個々の教育活動は、元々の教育課程に位置付けられているものを中心に、特色ある活動を組み合わせて継続的に行われている。指導に当たっては、個別の学習活動をつなぐ「これまで・ここでは・これからは」という系統性を意識し、児童に気付かせていくようにしている。

図9は、4年生の活動から見た、「タテ・ヨコのつながり」模式図である。4年生は、高山社跡に関する直接的な学習を行うこともあり、他者との多様な関わりが設定されている。下学年から培われた養

蚕への興味関心が基盤になり、学習発表会や様々な情報発信等の具体的なゴールがあることで、意欲的な活動が行われている（2018 春山秀幸）。

児童は、養蚕農家との交流や養蚕体験での観察の中で、蚕の姿の変容や触感、桑の葉を食む音や匂いを知り、養蚕という仕事や農家の生活などについて身近に感じている。また、養蚕農家の方の生の声を通して、養蚕という産業が衰退していることを知り、後世に伝えていくことの大切さや難しさを切実に感じている。そのため、高山長五郎や高山社跡のことを発達段階なりに自分事としており、世界遺産について考える上で貴重な体験となっている。

4年生が収穫した繭は、地域団体の協力で行われる6年生の親子体験活動（卒業式用の繭コサージュづくり）の材料として提供している。理科や社会・総合としての養蚕体験は、同時に6年生のためにという目的の達成感や、人の役に立ったことを実感し自己有用感を高める活動にもなっている。

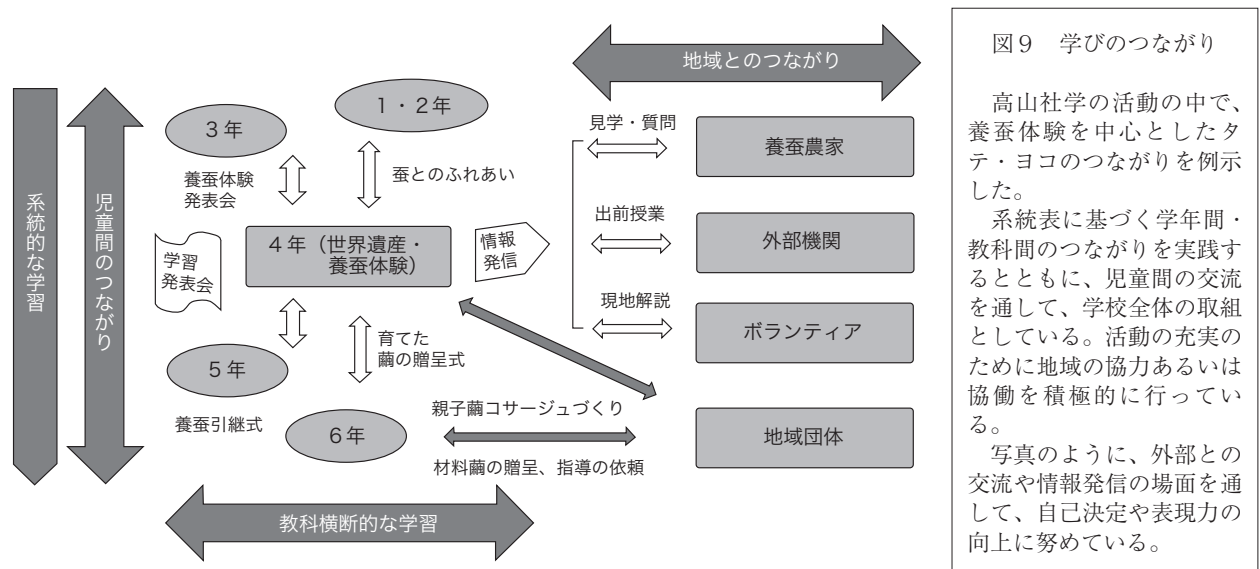


図9 学びのつながり

高山社学の活動の中で、養蚕体験を中心としたタテ・ヨコのつながりを例示した。系統表に基づく学年間・教科間のつながりを実践するとともに、児童間の交流を通して、学校全体の取組としている。活動の充実のために地域の協力あるいは協働を積極的に行っている。写真のように、外部との交流や情報発信の場面を通して、自己決定や表現力の向上に努めている。



養蚕農家との交流



学習発表会



親子繭コサージュづくり

低学年は「いつかは自分たちが蚕を育てる」という思いを、中学年は「いつかは自分たちがコサージュをつけて卒業」という小学校生活のつながりへの意識を抱く。そして、高学年は、これまでの学習を発展させながら自分の未来像を描く中で、次代につながる活動、他者・地域との関与について考えていく。親子で作った揃いのコサージュを胸に臨む卒業式は、多くのつながりの中で成長してきたことの証となり、保護者にとっても感慨深い活動となっている。このような学びのサイクルが、世界遺産である高山社跡に関する学習を核に形成されている。

平成30年に開催された群馬県・藤岡市ユネスコ研修会では、美九里西小学校の児童が100名ほどの参加者に向けてSDGsの視点を交えた実践内容を発表した。これまでも、学習発表会の内容を大会場で市民向けに発表するなど、児童が自分たちの取組を外部に発信する場を、学校内外に意識的に取り入れてきた。こういった活動により、自分の考えを表現することへの自信や、次の学習への意欲が高まっており、学校の文化として引き継がれている。

さて、藤岡市内の小中学校では、平成24年度以降、随時ユネスコスクールに加盟をしてきた。各校では、校区の特色を活かしながら、重点となる活動を取り上げて実践を行っている。内容は、高山社学に直接関わる世界遺産学習を始め、人権、福祉、国際理解、環境など多岐に亘っている。ESDおよびSDGsの推進にあたり、ユネスコスクールとしての活動の意義は大きい、さらに工夫の余地があるのが実態である。しかし、コミュニティ・スクールの体制づくりの中で、ユネスコスクールの活動やSDGsへの取組を地域との協働の中に位置付け、重点的に推進を始めようとする動きも出てきている。内容の整備や発信を通して、これまで以上に活動が広がることが期待される。このような活動の中での、高山社学の可能性や方向性を検討していく必要がある。

③高山社学を通して育まれた思い

世界遺産学習と関連した高山社跡を核とする学習を通して、児童生徒に身近な地域に対する愛着や誇りを持たせることができたか。また、培われた地域

意識を基盤に多様な見方や考え方に触れることで、どのような思いを持つことができたのか。このような視点から、社会科および総合的な学習における世界遺産学習やSDGsの視点を交えたワークシートを作成し、東連携型小中一貫校（東中学校区の小中学校）の児童を対象に実施した⁽⁶⁾。また、指導者側の意識を確認するため、教職員にも同じワークシートによる調査を実施した。

設問1・2は、高山社学に関わる一連の学習を通して、どのような考えを持ち、それが実際にどのような態度化につながったかを把握するものである。

設問3は、高山社跡を素材にした学習を通して育まれた地域意識を基盤に、自分たちが思い描き、関与していくであろう未来の「まち」の姿をイメージさせることを目的としている。

〈設問1〉「わたしたちのまち」に、世界遺産の「高山社跡」があることについてどう思いますか。

児童からは「自分たちの町にこんなにすごいものがある。」など「誇りに思う」という意見が64%を占め、高山社跡への理解や関心を通して地域意識が高まっている様子が認められる。また、「昔のことがわかる大切な場所なので調べてみたい。」(23%)など、歴史的な意義を認めるとともに、学びへの意欲につながっていることもわかる。教職員からは、「どのような未来を創造していくかを考えるための遺産」と捉えるなど、教育的な素材として重視する考え方が多くを占めた。

〈設問2〉「高山社跡」を未来に残すためには、どんなことをすればよいでしょうか。

児童は、学習を通して自分たちが関与できることとして、「高山社跡のよさを外部に発信したり、下学年に伝えたりする」ことが重要だと考えている(39%)。また、学習から得た知識として、修復や保存の大切に加えて、防災対策や周辺環境保全を訴える声も多い(39%)。教職員も「この地域に住んでいるからこそ得られる情報の発信」「地域の人が残したい、知らせたいと思わなければ、未来にはつながっていかない」と身近な地域の歴史を学ぶこと、

発信することの重要性を訴えている。

〈設問3〉「わたしたちのまち」について考えよう。

①20年後の「わたしたちのまち」が、どんな町になってほしいと思いますか。

児童は、「自然と歴史・文化を大切にす町」(36%)へ向けて、現在のまちのよさを理解し、それを継承・発展させたいという思いを持っている。また、「にぎやかな町」「豊かで幸せな町」「平和で安全にくらせる町」が各16%と続いている。教職員も児童と同じ傾向の意見を上げるとともに、「住みたい町」として若者が生活の場として選んでくれる、持続可能な町づくりへの思いを上げている。

②また、そのために自分ができることはなんですか。

ゴミ拾いなどのボランティアやリサイクルなどの環境教育に関わる実体験に基づいて「自然や身の回りの環境」に関わることを上げる児童が多い(38%)。また、「思いやりやあいさつを大切にす」(27%)など、身近な生活の中で感じたり実践したりしている人権的な視点との関連が見られる。一方、町づくりへの関与という視点では、「伝統・文化を守る」は14%に止まり、日常生活の中で関わっていく場面の少なさがうかがわれる。教職員は、自然環境や伝統・文化、地域とのつながりの重要性を上げ、未来を担う子どもたちの育成へ向けた教育活動に取り組んでいこうとする思いを伝えている。

③住み続けたいと思える「わたしたちのまち」のキャッチフレーズを決めよう。

児童が上げたキャッチフレーズには、上記の設問への回答を反映し、文化(29%)、自然(34%)と関連した内容が目立つ。中でも、「未来まで自然の中の高山社」「自然あふれ 歴史あふれる高山社」など、高山社跡そのものを表現したものが多い。「この町を 緑と文化のあふれる町へ」「緑が多く文化の残る 平和な藤岡」「守り続けた自然やほこり 何年たっても守り続ける」という声は大切にしたい。教職員からは、「働くなら藤岡市 自然いっぱい 歴史とともに」というように、次代を見据え

る視点も示された。児童・教職員両者の意見には、全体として関心や愛着を持って高山社跡に向き合っている様子が認められた。

これとは別に、児童の声には、各校が重点的に取り組んでいる教育活動(環境・平和学習など)の内容が反映されているものも多く、SDGsの学習との関連を感じる。「SDGsの考えを取り入れた教科指導と生徒による自治活動を融合して、生徒の学力向上と思いやりの気持ちなどの成長を図る」という教職員の考えも重要である。学校教育と実社会をつなぐ視点を意識する考えもあり、これらを支える地域の力を生かした相乗的な効果を引き出していくことが大切である。

おわりに

本稿では、藤岡市における高山社学の実践を通して、世界遺産学習の展開について取り上げてきた。

県内では、それぞれの地域の特色を生かした教育活動に加えて、ふるさと群馬の世界遺産という視点で富岡製糸場と絹産業遺産群を取り扱う事例も見られる。小学校中学年向けの副読本には、学習指導要領の改訂を受け、4年生の「地域の文化財」「地域の発展に尽くした先人」または「県内の特色ある地域」との関連で取り上げられている。富岡製糸場等の見学を実施する学校も多い。

富岡製糸場と絹産業遺産群の所在する4市町では、各資産を地域のよさとして捉え、教育の基本方針の中に位置付けている。

富岡市の教育方針には、「『富岡製糸場を教材として取り入れた学習』を通して、郷土への誇りと愛情の育成を図る」ことが記されている。授業の中では、現地見学や富岡製糸場伝道師協会など外部団体との連携が計画的に行われている。市では夏季休業中に、世界遺産について学ぶ場としての「世界遺産キッズプログラム」を開設している。

伊勢崎市は、「学府制」と呼ばれる小中一貫教育とコミュニティ・スクールの一体的な仕組みの中で、「伊勢崎ふるさと学習」に取り組んでいる。絹産業関連では、伊勢崎銘仙を素材として家庭科に位置付

けられた交流・体験学習が特徴的である。

下仁田町では、「地域素材を活用し、郷土への愛着を育む」ため、下仁田学習という小中9年間での系統的な学習を展開している。世界遺産「荒船風穴」に加えて、「下仁田ジオパーク」や名産品などに関わる特色ある取組が見られる。県立下仁田高校では、荒船風穴プロジェクトとして、解説ボランティアや学習会、PR事業などを通して地域振興に寄与する具体的な取組を推進している。

藤岡市では、既述したように「伝統と文化を尊重するとともに、地域の発展に尽くした先人の働きを理解することを通して、郷土に対する誇りと地域を愛する心の育成」を掲げている。高山社学は、この方針を具現化するために小中9年間における系統的な学習や活動の中で、じっくりと地域意識を醸成し、コミュニティ・スクールの仕組みを生かして多様な活動につなげ、発展させる学習である。世界遺産学習を交えて身についた力や思いを、子どもたちの笑顔・やる気、さらには次代を担う当事者としての希望につなげていくことが、高山社学に課せられた役割であろうと考える。

群馬県立世界遺産センターは、富岡製糸場と絹産業遺産群の4つの構成資産の関連性を明確にしておくことを通して、世界遺産としての本来の価値を伝えていくことを一つの目的としている。

学校教育の中でも、同様に4つの構成資産のつながりを意識して学んでいくことが、郷土の世界遺産をより深く理解する上で欠かせないものとする。教育課程に位置付けられた各地域の地域学習・ふるさと学習の実践と関連付けて、正しい価値の理解に支えられた世界遺産学習を推進することが重要である。そのためには、教育委員会・学校・教職員との連携を図り、具体的なプログラムを開発・発信⁽⁷⁾していく必要を感じている。

註

(1) 平成21年度、筆者は美九里西小学校教頭として地域の文化財や人材を活用した教材開発に取り組んだ。高山社跡をその核に位置づけ、地域の養蚕農家との交流や蚕の飼育体験等を実施。翌年度、4年生社会科を担

当し、担任との連携により、社会科、総合的な学習の時間を核とした教科横断的な学習や、学年の系統性を意識した教育活動の編成を行った（平成30～令和元年度は校長として実践を推進）。その後、小野小学校、美土里小学校等の勤務校においても、校区の特色を生かした高山社学に関連する授業づくりに関わった。

- (2) 「令和2年度 藤岡市の学校教育」の特色ある教育活動・高山社学の中にも、「持続可能な藤岡市」という表現が記載され、ESD・SDGsの視点を明らかにしている。
- (3) 地域学習・ふるさと学習については、2001 岡山県教育センター「中学校における地域学習に関する研究」、2007 安部耕作「近江八幡市のふるさと学習」、2012 古川康成「児童の主体性を育む新たな『ふるさと学習』の提案」等を参照している。
- (4) 田淵五十生・中澤静男「ESDを視野に入れた世界遺産教育 -ユネスコの提起する教育をどう受けとめるか-」教育実践総合センター研究紀要(16), 59-66, 2007-03 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター
- (5) 田淵五十生は、世界遺産の有無に関わらず行われる取組を、「地域世界遺産学習」という用語で説明している(2011 田淵五十生「世界遺産教育は可能か」奈良教育大学ブックレット5)。地域や時代を超えた興味関心につながる活用の可能性は広い。
- (6) 昨年度に高山社跡に関わる学習を行った現5年生を対象に実施。また、今年度の東連携型小中一貫校小中合同研修会で、筆者が「高山社学と世界遺産学習・SDGs」という講演を行った際に、教職員の協力を得た。
- (7) 群馬県立世界遺産センターHPでは、授業に使える子ども向けパンフレットやキッズページが掲載されており、活用できる

参考文献

- 1897 新井茂平「高山長五郎氏伝 一名・養蚕改良高山社来歴」
- 2008 奈良市教育委員会「奈良大好き世界遺産学習」
- 2012 伴野悠理「自ら課題意識をもって探究的に取り組める児童の育成 -文化遺産高山社を題材とした総合的な学習の時間を通して-」藤岡市教育研究所研究紀要第42号
- 2013 木村弘美・小板橋庸・磯部摩耶子・荻原麻理「児童の郷土愛を育む社会科指導の工夫 -単元間をつらぬく『ベースファイル』の作成・活用を通して-」藤岡市教育研究所第42集
- 2014 高山社学班(関口義幸・大木麻美・春山秀幸)「高山社学ティーチャーズガイド1」藤岡市教育研究所研究紀要第43号
- 2018 春山秀幸「主体的に学び合い、自分の考えを広げ深めようとする児童の育成 -地域的特色を生かした学習における気付きの質を高める指導を通して-」振興ぐんま117号